

なるは、みな足なき折櫃也。古き賭射の繪の衝重は、折數のくせにて、もつかしければ、かきもらしける也。狩衣など、の鱗袖と大袖と縫目、かきて、大袖と身との縫めは、かきもらせるの類なり。且古き繪の折敷、皆、ふちをばかきもらせり。もし今の人むかしの折敷は、かくふちもなくてあり。やといふべきか。されど、ふちの折曲られてあればこそ、折敷とはいふべし。折敷の名あるに、疑なしげにも御前に、古しへよりふちはありつるを、むつかしければ書もらしたるに、御前にく注するに、およばず。雜要抄に、仁和寺殿競馬行幸の御遊の看物記したる所に、殿下の前の看物菓子等の末に折敷二枚。大臣の前の末にも已上折敷二揃とあり。されどかゝる度に折敷のみにて給はする例のなれば、此折敷は折櫃の蓋にて、則折櫃の衝重なる事明らか也。かゝれば衝重には、足なき折櫃を用らる也。折まげたる定め也。ける。

〔貞丈雜記膳部〕一ついかさねとハ衝重と書いて、三方、四方、供饗の總名也。皆ついがさね也。上の臺と下の足とをつきかさねたる物なる故、ついがさねと云也。三方に穴を開けたるを三方と云、四方に穴を開けたるを四方と云、穴を一つもあけざるを供饗と云。此三品ハ何れも同じ形なり。足付ハ衝重の部にあらず。

〔玉函叢說〕衝重寸法 井三方

一面八寸

一緣の高サ 一寸 但面八分の一

一厚サ 一分六厘餘 但縁の高サ 六分の一

一面の餘リ 五厘餘 但厚サ の三分の一

一筒の渡リ 六寸四分 但面の十分の八

一筒の高サ 五寸七分六厘 但筒の經リ 十分の九

一緣筒の角の折目八分 但面の十分の一